

今号は、平成28年秋に研究発表を行った学校を中心にその成果と様子について報告します。

＜研究発表会報告＞

東京都台東区立根岸小学校

「21世紀を生きる ＝新しい時代を拓く教育課程の創造＝ ～能動的・協働的な学習活動を通して、自己の学びを確立していく児童の育成～」

12月1日、根岸小学校において平成27・28年度台東区教育委員会研究協力学校の発表会が行われた。長い研究主題には、小西校長が「紀要のはじめに」に述べていた『「教師の側から子どもの側へ軸足を移す」「子どもの名前で語る」を合い言葉に、一人一人の児童に寄り添い変容を見取り、児童の「知りたい」「学びたい」を大切にしたい授業を展開してきた』という根岸小学校の先生方の熱い思いが込められているようである。

「教育課程の創造」と銘打っているだけに、授業では、新しい教科である「英語」を公開している。また、算数・算数と理科の合科・国語・社会・総合的な学習の時間と多様な教科での授業を公開した。更に、本学会としては懐かしい「はげみ学習」も公開した。発表会には、400人近い参加者があり、東京都での発表会としては最近まれに見る盛会だった。

当日の学習指導案にはどれにも、「しかけ1」「しかけ2」「しかけ3」という留意点を書いてある。これが発表会のポイントの1つである。「しかけ1」は『児童が興味・関心を持ち、確かな「問い」をもって問題解決に向かっていくためのしかけ』、「しかけ2」は『児童が興味・関心が「増幅」し、思考が「拡散」していくしかけ』、「しかけ3」は『児童の思考がねらいに向けて「集約」「焦点化」されていくしかけ』ということであった。おもしろいアイデアである。



学習風景は、研究主題にあるように「能動的・協働的な学習活動を通して」「自己の学びを確立していく」ことの追求するために、一人学びで学習課題を追求する姿やグループで協力して活動する姿が中心だった。特に、一人学びの姿は本学会では、なじんだ姿であり、懐かしさを感じるのは、最近このような学習が少なくなったからであろう。

授業終了後は、学年ごとに分科会が行われた。各分科会ごとに講師がつき学年ごとの発表と協議が行わ

れた。私が参加した2年生の生活科の分科会は、分科会提案も協議も講師の指導も短かったが、本校のメイン講師である上智大学の澤田教授が講師だったこともあり、学習課題やゴールを誰がどのように決めるのかなど、主題に迫る話し合いができ、有意義な会となった。

全体会では、研究発表が行われた。その後、上智大学の澤田教授と文科省の田村視学官と直山教科調査官で鼎談が行われた。直山氏は京都弁で英語教育の未来と可能性を熱く語った。田村氏は、次の学習指導要領のポイントの「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」を説明した。澤田氏は「子どもの姿に着目した」という根岸小学校の研究の様子を紹介した。



田村氏は、当初、アクティブ…ラーニングのポイントを「協働的な学び」としたがグループ学習をすれば良いと誤解されてきたので「対話的な学び」とした、と説明したが、「対話的」にも「二人です」という意味合いがあるので、表現としては万全とは言いがたいのではないかと感じた。また、「主体的な学びが大事」と言いつつも、当日の一人学びの子どもの姿の質を批判的に述べていた。このような批判は、過去に緒川小学校や卯ノ里小学校で、またその後の実践校で受けた批判でもある。過去に学ぶとすれば、このような批判をはねのける質の高い「一人学び」を心がけなければならないのではないかと感じた。アクティブ・ラーニングが重視されつつも、一人学びを否定して話し合い活動のみでよとする風潮を感じている昨今だが、今後、この事が大きな課題になるかもしれないと感じた一時であった。

(文責 東京 佐久間茂和)

埼玉県上尾市立東中学校

新教科「グローバルシティズンシップ科」の取組

平成27～30年度 文部科学省指定研究開発学校(2年次)

18歳選挙実施により義務教育段階におけるシティズンシップ教育が注目されています。併せて21世紀型能力を踏まえグローバル社会に対応した資質・能力を育成し、持続可能な社会づくりの担い手を育成することが重要視されています。このような背景にあり、東中学校では中学校教育課程におけるシティズンシップ教育の在り方に関する研究開発を目的として取り組んでいます。今年は、文部科学省指定研究開発2年次の発表が12月9日に行われました。



新教科「グローバルシティズンシップ科(GCE)」は、1年生:50時間、2・3年生:70時間(「総合的な学習の時間」を充てる)実施しています。学習形態は、教師を「ファシリテーター」として参加型学習を目指しています。学習内容は、「公正・公平な社会づくりのための課題」「環境、貧困、紛争など地球規模の課題」「多文化共生に関わる課題」「よりよい町づくり、学校づくり、生徒の自治に関わる課題」があります。

評価方法は、学習した内容を踏まえ、ワークシート等やグループ活動のまとめからポートフォリオ評価

を行っています。ループリックを作成し、文章記述による評価をしています。授業担当者等は、各学年教員、NGO、JICA、大学関係者等が行っています。

研究2年次における成果は、①生徒の社会参画意識の向上、②教員間の連携・協力・意欲の高まりが挙げられます。課題としては、①「評価」をめぐる課題（指導と評価の一体化）、②「行動の変容」や「非認知的スキル」の計り方と指標作り、③GCEと教科等との連携（カリキュラムマネジメントの視点から）、④実践の継続性（教職員の異動に左右されない研究の継続性）です。

第3学年「上尾をプロデュース！」という単元（研究主任 松倉紗野香教諭）では、現状を分析し、校外学習（市役所、市民団体訪問）、町づくりの提案を関係機関にプレゼンテーションする流れで取り組んでいました。発表当日、「子育て」をテーマに取り組んでいた女子のグループは、身近で切実な課題であるため、タスクの質が高いものでした。

指導講評（奈須正裕教授）では、「子供なりに当たりを付けて学んでいき、探究の着眼点（合理的・政治的・明示的・民主的・科学的）や手順を教師が示し過ぎず、失敗から学ばせることも大切である。知識は2種類あり、1つは教科で体系的・系統的に学ばせるもの、もう1つは生活実感として身に付けさせるもの。カリキュラムの整理をし、どちらかを先行するのか、あるいは同時進行か、研究するとよい。教科・関連的指導の定着を図る」等のお話がありました。

ごく普通の公立の中学校での研究の為、教職員の研究に取り組む意識や異動による継続性の問題が課題として挙がっていますが、そのような中で研究開発を進めることは難儀であるが故に価値が高いものではないかと考えます。教科担任制の中学校で、全職員でGCEに取り組み、各教科等との連携を深めることは、学校力を高め、生徒の学力向上に確実につながるものと思われます。

（文責 埼玉 熊坂由美子）



岐阜聖徳学園大学附属小・中学校合同公開研究会 ー第10回全国大会に向けてー

11月18日、岐阜聖徳学園大学の附属小・中学校で合同公開研究会が開かれた。両校共通の研究主題は「自ら課題をもち、他者と関わりながら問題解決できる子どもの育成」。当日は学生・教員を中心に400人を越える参観者があり、プログラムの最後には「新指導要領の公表前夜～私たちはコンピテンシーの拡充・洗練をどのように目指すべきか～」と題したシンポジウム（奈須正裕・澤田 稔・佐野亮子・成田幸夫の各氏）があった。



両校は私大の附属校ということもあって、それぞれが特色ある教育活動を展開している。

小学校では、学年を追って教科担任制が採用され、1年生から英語の学習がカリキュラム化されている。指導もユニークで、外国語学部の学生やネイティブの教員が全面支援して英語だけでコミュニケーション

を図る English World が開設されていたり、教育学部の教員やゼミ生の指導による英語劇の学習が行われたりしている。姉妹校のニュージーランドの学校とは頻繁にテレビ会議が活用され、多くの児童が海外生活体験プログラムに参加している。ほかにも、日本文化を重視した総合学習や教科の一人学びも行われており、週1時間セットされている「情報」では情報の科学的理解・情報社会に参画する態度などの指導のほかに、プログラミングによりロボットを動かして表現する学習なども段階的に取り入れられている。

一方、中学校は5年前に県内唯一の教科センター型校舎（写真）に生まれ変わり、教科ゾーンと呼ぶ各教科のワークスペースを駆使した学習パッケージによる一人学びが続けられている。夏には学習環境のワークショップを開くなど多様な学びを支える仕掛け作りにも力を注いでいるほか、イギリスでの海外語学研修、合唱部によるミュージカル公演など、私学の特色を生かした魅力的な活動を展開している。

公開研では、小学校の生活科「みんなとつながる・自分がつながる」、特設単元の6年「音と数」（写真）、情報の6年「プログラミングをしてみよう」などの学習に参観者が集中し、中学校の2年理科「大気の動きと日本の四季」、3年英語パッケージ学習「Global Issue って?」、2年体育「バレーボール」などにも人だかりができていた。いずれも大学教員と何度も協議しながら立案していて、大学教育学部と小中学校との連携という面でも、示唆に富む体制ができあがりつつある。



平成29年10月21日（土）22日（日）（予定）には個性化教育学会の全国大会とコラボしも、両校に加えて附属幼稚園も含めた3校園による合同公開研が計画されています。多くの会員の皆様のご参加を、ぜひお願いしたい。

（文責 岐阜聖徳学園大学附属小学校 小林 永児）

＜第10回全国大会のお知らせ＞

詳細につきましては、最終案内（2017年5月頃）としてご案内申し上げます。

日本個性化教育学会第10回全国大会

会場校：岐阜聖徳学園大学及び同附属幼稚園・小学校・中学校

期日：2017年 10月21日（土）～22日（日）

＜事務局への問い合わせ・連絡先＞

庶務部長 佐久間 茂和
〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷
3-9-14-510
TEL 048-678-1681
e-mail sakuma.a@s7.dion.ne.jp
日本個性化教育学会ホームページ
<http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第28号
平成29年1月8日発行

編集責任者	事務局長	奈須 正裕
編集	広報部	多田 信夫